九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ウィトゲンシュタインにおける論理空間

林, 大悟
九州大学大学院人文科学府 : 博士後期課程 : 倫理学

https://doi.org/10.15017/1448759

出版情報：哲学論文集. 41, pp.25-39, 2005-09-30. 九州大学哲学会
バージョン：
権利関係：

ウィトゲンシュタインにおける論理空間

林　大　悟

本稿は『論理哲学論考』[1]の根本思想としての「論理空間（logischer Raum）」を明らかにすることを試みる。『論考』は1.13において既に「論理空間における諸事実が世界である」と、「論理空間」によって『論考』が扱う世界を規定している。さらに「論理空間」は哲学復帰後のウィトゲンシュタインの考察においても一貫している。論理空間は『論考』や中期ウィトゲンシュタインにとって最も重要な思想である。にもかかわらず、一般の解釈において論理空間はほとんど重要視されないし、誤解もされている。

それ故、本稿では『論考』を可能にする根本思想としての論理空間に光を当てたい。そのためには多次元空間という数学のモデルに依拠した論理空間の解釈が必要である。

論理空間を正確に捉えるために、本稿では「数学モデル」が『論考』成立の重要な鍵であることを示唆する（一）。そして、「日常モデル（ミニチュアモデル）」に定位した論理像の解釈の可能性を提示し（二）、その理解では『論考』の論理像、論理空間を捉えられないことを明らかにする（三）。さらに、論理像としての命題を可能にする多次元空間としての論理空間という根本思想を提示し（四）、その思想が哲学復帰後のウィトゲンシュタインにおいても一貫しているということを明

らかにしたい（五）。

一　「日常モデル」と「数学モデル」

『論考』は現実の像として命題を捉える。「命題は現実の像である」（TLP, 4.01）[2]。命題は像としてあらゆる現実を写像するが、『論考』はこのような像を「論理像（logisches Bild）」と呼ぶ。「像は像がその形式を持っているあらゆる現実を写像する(abbilden)」（TLP, 2.171）、「あらゆる像はまた論理像（logisches Bild）である」（TLP, 2.182）。一九三一年一二月九日のウィトゲンシュタインはこのことに言及している。『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』[3]は、「私が『命題は事実の論理像である(Der Satz ist ein logisches Bild der Tatsache)』と書いたとき」と『論考』を回顧して以下のように語る。「この像の概念を私は二つの方向から受け継いだ。第一に描かれた像から、第二に既に普遍的な概念（allegemeiner Begriff）である数学者の像から。なぜなら数学者はまさに、画家がこの表現を用いないようなところで、写像（Abbildung）についても語るからである」（WWK, S.185）。

ウィトゲンシュタインは、「像」の概念の二つの由来について語っている。一つは「描かれた像」であり、もう一つは「数学者の像」である。これは、Abbildung という言葉の二つの用例を意味する。ドイツ語の Abbildung という言葉は、絵画や彫刻などによる「模写、描写」という意味と、数学における「写像」という二つの意味をもつ。一九三一年の発言は、『論考』の Abbildung という概念が「描写」という概念と数学者の使用する「写像」という概念の二つに由来していたことを示唆している。画家が用いる Abbildung という概念は絵画などによる「描写」という日常的な意味をもつ。このモデルを①「日常モデル」と呼ぼう。それに対して数学における Abbildung という概念は、単に絵を描くという日常的な意味ではなく、「普遍的な概念（allegemeiner Begriff）」としての「写像」を意味する。このモデルを②「数学モデル」と呼ぼう。

ウィトゲンシュタインは「写像」を数学の領域で考えていることを自ら語っている。この「数学モデル」が『論考』の写像の解釈を可能にする。『論考』は「写像」の例として「交響曲」の「総譜」「レコード盤の上の溝」への射影と、「音符言語（総譜）」の「レコード盤」への翻訳について語る。「それによって音楽家が総譜から交響曲を取り出すことができ、人がレコード盤の上の溝から交響曲を導出でき、そして最初の規則に従って再び総譜を導出することができるような、普遍的な規則が存在するということ。まさにこのことのうちに外見上このように全く異なる形成物の内的な類似性が存する。そして、かの規則は、交響曲を音符言語に射影するところの射影（Projection）の法則である。それは、レコード盤の言語に音符言語を翻訳する規則である」（TLP, 4.0141）[4]。「レコード盤の溝」や「総譜」が「交響曲」の像であるという主張を①「日常モデル」から理解することは出来ない。画家は、外見上全く異なる「レコード盤の溝」を「交響曲」の描写とは決して言わないだろうし、「総譜」を「交響曲」の絵とも決して言わないだろう。「日常モデル」では「全ての似姿、我々の表現形式の全ての像的性格の可能性は写像（Abbildung）の論理にかかっている」（TLP, 4.015）という主張を理解することが出来ない。この「写像」の意味は変換群に対する不変量という数学の考えによってのみ理解できる[5]。『論考』の「写像（Abbildung）」は「数学モデル」によってのみ理解できる。「数学モデル」のポイントは「日常モデル」の普遍化にあるのである。これが、一九三一年一二月九日のウィトゲンシュタインが語る数学者から受け継いだ「写像」の意味である。

「数学モデル」に定位することは『論考』の「論理像」、「論理空間」を正確に捉える上でも重要である。「写像」は多次元多様体としての数学的空間（論理空間）における写像である。一九三一年一二月九日に語られる「命題は事実の論理像である」（傍点は筆者による。以下の引用においても同様。）というテーゼも数学的空間としての論理空間が可能とする。事実、『論考』は命題と現実が持つ多様性について論じる場面で「数学的」という言葉を用いている。「命題においては、命題が描出する状態においてとまさに同じだけのものが区別されなければならない。／両者は同じ論理的（数学的）（logisch (mathematisch)）多様性を所有するのでなければならない」（TLP,4.04）。「論理的」という言葉が「数学的」と言い換え

られている。「数学モデル」に定位してはじめて「論理像」、「論理空間」の意味を捉えることが出来るのである。以下ではこのことを確認したい。

二　日常モデルとしてのミニチュアモデル

まずは、①「日常モデル」によって「論理像」を解釈する可能性を検討しよう。『論考』3.1431は「我々が命題記号が文字記号からではなく空間的諸対象（例えば机、椅子、本）から構成されると想像するとき、命題記号の本質が非常に明晰となる」と語る。「命題記号」のモデルとして、文字記号ではなく椅子や机、本などの空間的対象が挙げられている。ここから命題のモデルとして机や椅子や本などの空間的な配置を考えることが出来る。例えば「本が机の上にある」という現実のモデルを、本のミニチュアを机のミニチュアの上に置くことによって考えることが出来る。同様に、本のミニチュアを机のミニチュアの右に置くことによって「本が机の右にある」という現実のモデルを、椅子のミニチュアを机のミニチュアの左に置くことによって「椅子が机の左にある」という現実のモデルを考えることが出来る。このようなミニチュアの配置によって例えば部屋の中にある家具や本などの配置を再現することが出来るだろう。このようなミニチュアを命題とみなす訳である。このような空間的対象の配置を命題のモデルとする考えを像の「ミニチュアモデル」と呼ぼう。「ミニチュアモデル」は数学的な考えを前提する必要はない。これは像という言葉の日常的な意味に基づいている。「ミニチュアモデル」は現実のミニチュア（絵）を命題として理解する①「日常モデル」である。

ウィトゲンシュタインはパリの法廷で自動車事故が車の模型と人形で再現された記事を見て命題が現実の像であるという発想を得た、と言われている。このことは『草稿』[6]における一九一四年九月二九日の記述に現れている。「命題の普遍的概念は命題と事態の対応の全くの普遍的概念をも含む。すべての私の問の解決は極めて単純でなければならない！／命題にお

いて世界は実験的に構成される。（パリの法廷において自動車事故が人形などで描出されるときのように。）／（私が盲目でなければ）そこから即座に真理の本質が明らかにならなければならない」（NB, 1914.9.29）。

ウィトゲンシュタインが「命題が現実の像である」というアイデアを得たエピソードをフォン・ライトは以下のように記述している。

「現実の像としての言語という考えがいかにしてウィトゲンシュタインに生じたかについての話がある。それは一九一四年の秋、東部前線においてだった。ウィトゲンシュタインはパリにおける自動車事故に関する訴訟についての雑誌を読んでいた。裁判では事故のミニチュア模型が法廷の前に提示されていた。その模型はここでは命題の役割、すなわち可能な事態の記述の役割を果たしていた。模型の部分（ミニチュアの家、車、人）と現実におけるもの（家、車、人）の間の対応ゆえに、それはそのような役割をもっていた。そのとき、人がこの類比を逆にして、その部分と世界との間の類似した対応に基づいて、命題が模型あるいは像としての役割を果たすと語ることが出来る、という考えがウィトゲンシュタインに生じた。命題の部分が結合される仕方――命題の構造――は現実における要素の可能な結合、可能な事態を表現するのである」。[7]

現実の自動車事故、すなわち自動車と人間の接触という位置関係を再現するために、自動車の模型と人形が使用される。自動車の模型が現実の自動車に、人形が現実の人間に対応し、それらの模型を接触させることで、「自動車が人間に接触する」という現実を描出する。さらに家のミニチュアを配置させることで、事故現場周辺の様子を再現することができるだろう。このようなミニチュアは命題の役割を果たすことができる。ここで、「この類比を逆にして」、命題がミニチュアの役割を果たすと捉えることができる。この場合も、命題を現実のミニチュアとして理解する「ミニチュアモデル」である。

さらに、一九一四年九月二九日のウィトゲンシュタインは、先の引用に続けて、二人の人間がフェンシングをしている絵を描き、以下のように言う。「この像において右の人が人間Aを表し、左の人が人間Bを指示するのなら、例えばこれ全体はおよそ『AはBとフェンシングをしている』ということを述べる」（NB, 1914.9.29）。二人の人間がフェンシングをして

いる絵において、右側の人間が現実の人間Aに、左側の人間が現実の人間Bに対応し、この絵全体が「AはBとフェンシングをしている」という現実を描写している。この絵が命題の役割を果たしているのであり、命題が絵の役割を果たすと理解できるだろう。

パリの法廷における自動車事故の模型による再現は、実際にウィトゲンシュタインが「命題が現実の像である」という着想を得たエピソードであるし、フェンシングの絵も命題のモデルとして描かれているように思える。同様に『論考』3.1431も机、椅子、本などの空間的諸対象を命題記号のモデルとして挙げている。「ミニチュアモデル（日常モデル）」による解釈は非常に分かりやすい説明であるし、それによって『論考』の「論理像」やそれを可能とする空間としての「論理空間」を理解できるように思えるかもしれない。

三　ミニチュアモデルの検討

しかし、「ミニチュアモデル」解釈は『論考』の論理像の誤解へと導くだろう。そして「論理像」の誤解は「論理空間」の誤解をも引き起こすだろう。「ミニチュアモデル」のような素朴で日常的なモデルではウィトゲンシュタインの論理像、論理空間を捉えることができない。それは第一に、ウィトゲンシュタインが『草稿』の一九一四年九月二九日の段階で、既に単なる像（絵、ミニチュア）と命題の区別を強調しているからである。そして第二に、「ミニチュアモデル」解釈はなぜウィトゲンシュタインが「像」「形式」「空間」を「論理的（logisch）」と呼ぶのかを説明できないからである。このことを確認しよう。

まず第一に、ウィトゲンシュタイン自身がミニチュアとしての像と命題を明確に区別しているという論点について検討しよう。『論考』3.1431の記述や、模型による自動車事故の再現、二人の人間がフェンシングをしている絵についての言及は

「ミニチュアモデル（日常モデル）」解釈を支持する根拠であるように見えるかもしれない。しかし、先程の一九一四年九月二九日の引用に続く発言に注目すべきである。

「我々は確かに我々がすべての事態を紙の上の像にもたらすことが出来るという確信を持たないが、しかし我々が事態の全ての論理的性質を二次元の文字において写像することができるという確信を持つ、と我々は語ることが出来る」（NB, 1914.9.29）。

「すべての事態を紙の上の像にもたらすことが出来るという確信を持たない」という見解が「事態の全ての論理的性質を二次元の文字において写像することができるという確信を持つ」という主張と対比されている。「二次元の文字」とは命題である。命題はすべての論理的性質を写像することが出来るが、それを紙の上の像は描くことが出来ないと主張されている。ここでウィトゲンシュタインは単なる紙の上の像（絵、ミニチュア）と命題の違いを明確に区別している。

単なる像と命題との違いは「論理的性質」という言葉のうちに現れている。「論理的」という言葉が「数学的」と同義で用いられていることから分かるように、そのポイントは普遍化にある。命題が事態を写像するということで、単なるミニチュアをつくるということが考えられているわけではない。この時点で既にウィトゲンシュタインは単なる絵（ミニチュア）を普遍化した「論理的な像」としての命題を考えている。ウィトゲンシュタインの思想が既に普遍化という次元にあるということは、一九一四年九月二九日の記述が「命題の普遍的概念は命題と事態の対応の全くの普遍的概念をも含む」という発言から始まっていることにも現れている。確かに『草稿』や『論考』は命題のモデルとして現実のミニチュアについて語る。しかし、実際のウィトゲンシュタインの思考は常に「ミニチュアモデル」を普遍化した次元においてなされている。一九一四年九月二九日のウィトゲンシュタインの主張のポイントは、命題と像（絵、ミニチュア）の同一視にあるのではなく、むしろそれらの違いにあるのである。

ウィトゲンシュタインは『草稿』の一九一四年九月二九日以前・以後においても、命題を単なる像と区別している。一九

一四年九月二〇日に「論理的写像」という言葉が使われ、二九日直後の一九一四年一〇月二日には「論理的に写像する」と言われる。「命題がその意味の論理的写像（logisches Abbild）であるということは、偏見のない目には明らかである」（NB, 1914.9.20）[8]、「命題は事態を論理的（logisch）に写像する」（NB, 1914.10.2）。このことからも、ウィトゲンシュタインが九月二九日の段階で既に、「日常モデル」に基づいた像ではなく、普遍的な「数学モデル」に定位した命題を想定しているということは明らかであろう。

また、単なる像と命題との違いというウィトゲンシュタインの考察は、命題結合における「否定」の問題にも現れている。同じ一九一四年に以下のように語られる。「人はいったい像を否定できるのか。できはしない。そしてここに像と命題の間の相違がある。像は命題としての役割を果たすことができる。しかしそのとき、像があるものを語るようにさせるものが命題に付け加わる。要するに、私は像が事実に合っているということを否定できるだけで、像を私は否定できない」（NB, 1914.11.26）。我々は命題を否定できるが、絵を否定できない。ここに命題と単なる像との区別が存する。命題と単なる像との差異は、命題結合という場面においても重要な論点である。[9]

ウィトゲンシュタインにとって命題と単なる像との差異を確定することが思想の鍵である。「しかし、命題を単なる像（bloßes Bild）から区別するものを確定することが重要である」（NB, 1914.12.2）。ウィトゲンシュタインが『草稿』で繰り返し強調するのは、命題が単なる像と同じであるという主張（「ミニチュアモデル」）ではなく、むしろ命題と単なる像との本質的な違いである。

さらに第二に、「ミニチュアモデル」解釈ではウィトゲンシュタインが「論理的（logisch）」という語を使用する理由を説明できないということを指摘できる。「ミニチュアモデル」解釈においては、なぜウィトゲンシュタインが像を「論理像」と呼び、命題と現実が共有する形式を「論理形式」と呼び、それを可能にする空間を「論理空間」と呼ぶのかを説明できないだろう。

ウィトゲンシュタインは『論考』2.182において、「あらゆる像はまた論理像である」と主張する。「ミニチュアモデル」は、空間的なものとものの位置関係を現実のミニチュアが描写するというモデルである。この場合、三次元空間におけるものの配置をそのミニチュアとしての命題が描写するという理解と言える。しかしそのために「論理像」などという概念は必要ない。実際に我々は絵やミニチュアを、「論理的な像」とは言わないだろう。これは「論理形式」についても同様である。「あらゆる像が現実と共有しなければならないものは論理形式、すなわち現実の形式である」（TLP, 2.18）は、「像が現実と共有しなければならないものは三次元の形式である」で十分なはずである。

また、ウィトゲンシュタインは『論考』1.13において、「論理空間における諸事実が世界である」と言い、2.11において「像は論理空間における状態を、諸事態の存立非存立を描出する」と語る。しかし「ミニチュアモデル」のために「論理空間」などという概念は必要ない。三次元空間における現実を三次元空間における像（ミニチュア）が描出するという記述で十分であろう。「論理空間における諸事実が世界である」（TLP, 1.13）という主張は、「（三次元）空間における諸事実が世界である」で十分であり、「像は論理空間における状態を、諸事態の存立非存立を描出する」（TLP, 2.11）は、「像は（三次元）空間における状態を、諸事態の存立非存立を描出する」で十分なはずである。

「命題は事実の論理像である」というテーゼの「ミニチュアモデル」による解釈は、一九三一年一二月九日のウィトゲンシュタインが「描かれた絵」と語る、①「日常モデル」のレベルにとどまっている。このような解釈は『論考』の「論理像」を捉えることができない。論理像としての命題を理解するためには、普遍的な②「数学モデル」こそが重要である。そしてそのための鍵が、「数学モデルに」依拠した「論理空間」の解釈である。単なる像と区別される論理像としての命題は論理空間を要請する。それは単なる三次元空間ではなく、多次元空間としての論理空間である。

四　多次元空間としての論理空間

『論考』1.13は「論理空間における諸事実が世界である」と主張する。『論考』は「世界」を「論理空間における諸事実」と定義する。命題は現実の像であるが、「命題記号は一つの事実である」(TLP, 3.14)。命題は事実であり、「論理空間における諸事実」として事実と命題が考えられている。つまり『論考』は「事実、命題」を「論理空間における諸事実」とする。命題と現実がともに多次元の論理空間にあるという思想が論理像としての命題を可能にする。このことを確認しよう。

『論考』の「あらゆる像 (jedes Bild) はまた論理像である」(TLP, 2.182)という主張が想定するのは空間的な像だけでなくあらゆる現実の像である。「像は像がその形式を持っているあらゆる現実 (jede Wirklichkeit) を写像する。／空間的な像は全ての空間的なものを、有色的な像は全ての有色的なものを写像する、等」(TLP, 2.171)。『論考』が語る論理像は、空間的な配置の像だけでなく、色についての像、音についての像など、すべての現実の像を可能とする。それゆえ、すべての現実を写像することの出来る像として「論理像は世界を写像しうる」(TLP, 2.19) と言われる。

しかし、「ミニチュアモデル」解釈は、このような主張を捉えることが出来ない。もしウィトゲンシュタインが、「ミニチュアモデル」のみを想定しているならば、三次元空間を想定するだけで十分だろう。しかし『論考』は、時間や色や硬さなど様々な現実の像についても語る。現実は空間のなかで生起する出来事だが、時間のなかで生起する出来事でもある。「ミニチュアモデル」解釈では、例えば出来事の時間に関する像をどのようにつくることが出来るのか説明できない。また同様に、色や硬さ音の高さなどの像をミニチュアでつくることも不可能だろう。「ミニチュアモデル」ではものとものの空間的な配置は描写出来るかもしれないが、時間、色、硬さ、音の高さなどの多様な現実を写像することは不可能である。『論考』は「あらゆる像はまた論理像である」という主張に対して「それに対して例えばどんな像も空間的像であるわけではない」

（TLP, 2.182）と語っている。「ミニチュアモデル」が可能にするのは「空間的像」でしかないが、それはあらゆる像の一部にしか当てはまらない。このようなモデルでは、「命題は全ての現実を描出することが出来る」（TLP, 4.12）という主張は不可能である。

それ故、『論考』は世界を三次元空間ではなく「論理空間」に置き換える。命題は像として「論理空間における状態を、諸事態の存立非存立を描出する」（TLP,2.11）[10]。ものの空間的な配置を写像するためには三次元空間で十分であるが、色に関する像を可能にするためには色を写像するための空間を想定しなければならない。同様に対象が硬さを持つなら硬さの空間という次元を追加しなければそれを写像出来ない等々である。そのために『論考』は現実と同じだけの次元を持つ論理空間を想定する。「視野における斑点は赤である必要はないが、一つの色を持つのでなければならない。視野における斑点はいわば色空間（Farbenraum）を自分のまわりに持っている。音は一つの高さを持つのでなければならず、触覚の対象は一つの硬さを持つのでなければならない、等」（TLP, 2.0131）。この主張は一つの色、音、触覚の対象が、色空間、高さ空間、硬さ空間、即ち論理空間をそのまわりに持っているというものである。命題と現実がその中にあるところの論理空間の次元として、「色空間」「（音の）高さ空間」「硬さ空間」などが挙げられる。これらの空間が論理空間の次元を構成する。命題と現実がその中にあるところの論理空間は可能な現実と同じだけの次元を備えている。すなわち、論理空間はあらゆる現実を命題によって写像すること、「論理像が世界を写像しうる」（TLP, 2.19）ことを可能にするために想定される多次元空間である。

『論考』は命題があらゆる現実を写像するために、現実と同じだけの次元、論理的・数学的多様性を持った論理空間を想定する。「特定の数の次元（Dimension）を備えた記号体系――特定の数学的多様性（mathematische Mannigfaltigkeit）を備えた記号体系――を形成することのみが重要である」（TLP, 5.475）、「命題においては、命題が描出する状態においてとまさに同じだけのものが区別されなければならない。／両者は同じ論理的（数学的）多様性（logische（mathematische）

Mannigfaltigkeit）を所有するのでなければならない」（TLP, 4.04）。ここで「論理的」が「数学的」と言い換えられていることに注目しよう。このような主張は「ミニチュアモデル」のような単なる三次元空間を前提する「日常モデル」では説明できない。論理空間の持つ多次元性が数学的多様性と言い換えられているが、それは論理空間が多次元多様体（Mannigfaltigkeit）として主張されているからである。[11] 論理空間は「数学モデル」に定位してはじめて理解できるのである。

このような多次元空間としての論理空間という理解から、なぜ『論考』が像を「論理像」と呼び、写像の形式を「論理形式」と呼ぶのかが明らかになるであろう。論理空間における像として命題が「論理像」と呼ばれる。そして、論理空間において像と現実が共有する形式が「論理形式」と呼ばれるのである。「論理像」、「論理形式」はあらゆる像を可能にする論理空間という前提が可能にするのである。「現実をおよそ――正しくであれ誤ってであれ――写像し得るために、どんな形式であれ、あらゆる像（jedes Bild）が現実と共有しなければならないものは論理形式、すなわち現実の形式である」（TLP, 2.18）。

論理空間という想定は『原―論考』[12] でも全く同じように登場する。例えば『原―論考』1.13において「論理空間における事実が世界である」と言われ、2.11において「像は論理空間における状態を、諸事態の存立と非存立を描出する」と言われる。その他『論考』における論理空間に関する箇所はすべて既に『原―論考』の中に登場している。[13] このことは論理空間という思想がはじめて『論考』の世界を可能にしていることを意味する。『論理哲学論考』は Logisch-Philosophische Abhandlung であるが、この logisch とは論理空間を意味する。『論考』の論理はすべて論理空間が可能にするのである。

五　中期ウィトゲンシュタインと論理空間

一九二九年に哲学復帰した後の、いわゆる中期ウィトゲンシュタインも論理空間についての考察を繰り返し行う。命題が現実を描出するために、両者が同じだけの多様性、次元を備えた論理空間のうちにあるという想定は哲学復帰後のウィトゲ

ンシュタインも一貫して保持している。このことは「論理形式について」[14]、『哲学的考察』[15]、『ウィトゲンシュタインとウィーン学団』等で論理空間についての考察が繰り返し行われることからも明らかである。中期ウィトゲンシュタインの思考も論理空間という『論考』の根本思想が支配している。このことを確認しよう。

「数学モデル」に定位した多次元多様体としての論理空間という考えは一貫している。一九二九年の「論理形式について」は以下のように語る。「我々は、様々な命題において、我々が我々の日常の表現の手段ではそのすべてを捉えることができないような、漸次的移行や、連続的な変化や様々な比率での組み合わせをもった、色や音等々のような時間的空間的な対象のすべての多様性（manifold）を備えた時間と空間の形式に出会う」（PO, p.31）。「論理形式について」は更に、視野における斑点の色、形と位置の記述を例示し、そのような記述が、命題が現実と同じだけの「論理的多様性（logical multiplicity）」を持つと主張する。しかし、このような色と形に関する記述について、「私は、何らかの仕方で完全になると言いたいのではない。私はそこで時間について述べていない」（PO, p.31）と言う。このことは、色や形という次元に加えて時間という次元、即ち現実と同じだけの多様性を持った空間を前提しなければならないという考えをもっているからである。

論理空間が多次元空間であるという主張は以下の記述からも明らかである。一九三〇年一月五日のウィトゲンシュタインは以下のように語る。「非常に多くの定項が命題のなかに現れる。その次元の多さだけ命題は異なる。それだけ多くの次元（Dimension）を命題がその中にあるところの空間は持つ。／命題は全論理空間（ganzer logischer Raum）に手をさしのべる」（WWK,S.91）。「命題のなかに現れる定項」とは命題の中に現れる語であり、それは現実の対象を指示する。命題が表現する現実と同じだけの多様性を命題はもつのであり、命題がその中に位置を持つところの空間、即ち論理空間はそれだけの次元を持つことが主張される。ここで語られている論理空間も、『論考』と同じく、現実と同じだけの次元をもつ多次元多様体という「数学モデル」に基づいた一つの論理空間である。

中期ウィトゲンシュタインは「色空間」（WWK,.S.89, PB,§1,§38, §83）、「長さ空間」（WWK, S.89）「硬さ空間」

(WWK, S.89)、「胃痛空間」(WWK,S.85-86)、「お金空間」(WWK,S.67)、「気温空間」(WWK,S.86)「聴空間」(PB,§42)、「明―暗―空間（より明るいとより暗いという空間）」(BP,§42,§45)、「騒―静―空間」(BP,§45) などについて繰り返し言及している。これは『論考』4.04で考えられていた論理空間が含む多様性・次元の具体例である。その中の一つとして「胃痛空間」についての考察を見てみよう。「私が『私は胃痛をもたない』と語るとき、私は私が『私は胃痛をもつ』と語るときと同じ多様性を現実に与えたのである。なぜなら、私が『私は胃痛をもたない』と語るとき、私は命題において既に肯定命題の存在を前提している。私は胃痛の可能性を前提している。そして私の命題は胃痛の空間（Raum des Magenschmerz）における場所を規定する。…私が『私は胃痛をもたない』と語ったとき、私はいわば『私は胃痛空間（Magenschmerzraum）の零点にいる』と語っているのである。しかし、命題は既に全論理空間（ganzer logischer Raum）を前提するのである」(WWK,S.85-86, 1930.1.5)。

胃の痛みについての言明、「私は胃痛をもたない」「私は胃痛をもつ」、が一つの胃痛空間のもとに捉えられている。私の胃の痛みの状態と私の胃の痛みについての言明が同じ胃痛空間のなかにある。これは現実と命題がともに論理空間のなかにあるという『論考』の主張と同じである。そして、胃痛についての言明が「全論理空間を前提する」と言われるが、これは『論考』3.42の論理空間についての主張、「命題が論理空間の一つの場所だけを決定することが許されているにもかかわらず、その命題によって既に全論理空間（ganzer logischer Raum）が与えられているのでなければならない」(TLP,3.42) と一致する。『論考』も中期ウィトゲンシュタインも論理空間について語る。『論考』における論理空間についての見解は、哲学復帰後のウィトゲンシュタインにおいても一貫して保持される。それは、命題と現実が一つの論理空間のうちにあるという主張、論理空間が多次元多様体としての数学的空間であるという主張なのである。

本稿では、多次元空間としての論理空間という『論考』の根本思想を明らかにすることを試みた。論理像を①「日常モデ

ル」のレベルで理解する「ミニチュアモデル」解釈は、「論理形式」「論理空間」の概念をも説明することが出来ない（三）。②「数学モデル」に依拠した多次元多様体としての論理空間を捉えることではじめて『論考』の思想が明らかになるのである（四）。そして、多次元空間としての論理空間は哲学復帰後のウィトゲンシュタインにおいても一貫する思想である（五）。『論考』においても、中期ウィトゲンシュタインにおいても、「日常モデル」のレベルで解釈することは誤解を招く。ウィトゲンシュタインの論理空間についての思考を貫くのは普遍的な「数学モデル」なのである。

なお、本稿が扱っていない論点として、哲学復帰後のウィトゲンシュタインの思想の変遷の問題がある。例えば、論理空間と要素命題の相互独立性の関係、論理空間と現象学的言語との関係の問題などが挙げられる。この点に関しては稿を改めて論じたい。

註

（1）Wittgenstein, L., Tractatus logico-philosophicus, Werkausgabe Band1, Suhrkamp, 1984. 以下本稿では『論考』、TLP と略記する。

（2）「我々は事実の像（Bild）をつくる」（TLP, 2.1）。

（3）Wittgenstein, L., Wittgenstein und der Wiener Kreis, Werkausgabe Band3, Suhrkamp, 1984. 本稿では WWK と略記する。

（4）「レコード盤、音楽の思想、記譜法、音波は、すべて言語と世界の間にある各々の写像の内的関係にある」（TLP, 4.014）。

（5）細川亮一、『形而上学者ウィトゲンシュタイン』、筑摩書房、二〇〇二年、九六―一〇六頁を参照。

（6）Wittgenstein, L., *Notebooks 1914-1916*, 2nd ed. G.H. von Wright and G.E.M. Anscombe, eds. Blackwell, 1979. 以下本稿では『草稿』、NB と略記し、日付を付す。

（7）von Wright, G.H., *A Biographical Sketch, in Ludwig Wittgenstein: A Memoir*, Oxford University Press, 1984, p.8.

(8) 「命題は、命題がその意義の論理的写像（logisches Abbild）であるということによってのみ、その意義を表現できる」（NB, 1914.9.27）。

(9) 『形而上学者ウィトゲンシュタイン』、一〇七―一〇八頁を参照。

(10) 「像は論理空間における可能な状態を描出する」（TLP, 2.202）。

(11) 『形而上学者ウィトゲンシュタイン』、九二―九五頁を参照。

(12) Wittgenstein, L., *Prototractatus An early version of Tractatus Logico-Philosophicus*, Routledge & Kegan Paul, 1971. 本稿では PT と略記する。

(13) 『原―論考』におけるその他の論理空間に関する言及は以下の通りである。「像は論理空間における可能な状態を描出する」（PT, 2.202）、「命題は論理空間における場所を決定する。この論理的場所の存在は構成要素の存在によってのみ、すなわち有意義な命題の存在によって、保証されている」（PT, 3.2101）、「命題が論理空間の一つの場所だけを決定することが許されているにもかかわらず、その命題によって既に全論理空間が与えられているのでなければならない。（さもないと否定、論理和、論理積などによって、常に新たな要素が――等位に――導入されるであろう）」（PT, 3.2104）、「像をめぐる論理的な足場は論理空間を決定する」（PT, 3.2141）、「命題は全論理空間に手をさしのべる」（PT, 3.2142）、「トートロジーは現実に対して、全――無限の――論理空間を〈自由に〉許す。矛盾は全論理空間を満たす、そして現実にとっていかなる点をも許さない。それゆえ、両者のどちらも、現実を何らかの仕方で規定することができない」（PT, 4.4485）。

(14) Wittgenstein, L., 'Some Remarks on Logical Form', *Philosophical Occasions 1912-1951*, pp.29-35 Hackett Publishing, 1993. 本稿では PO と略記する。

(15) Wittgenstein, L., Philosophische Bemerkungen, Werkausgabe Band2, Suhrkamp, 1984. 本稿では PB と略記し節番号を付す。

（九州大学大学院人文科学府博士後期課程・倫理学）